

# 横浜F・マリノス

YOKOHAMA F. Marinos

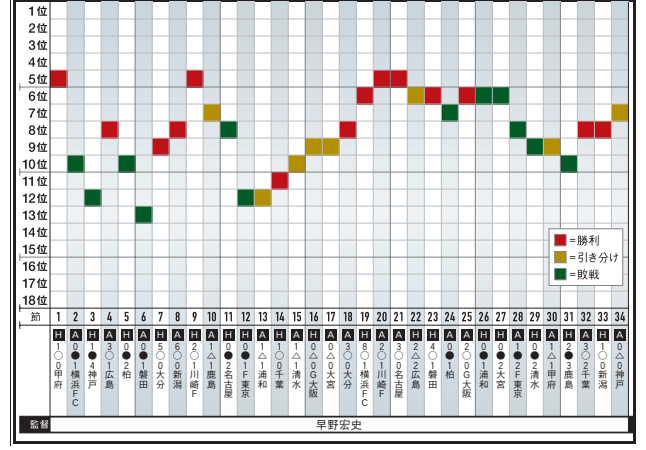


### 2007年間順位

7位

勝ち点50  
14勝 8分け12敗  
54得点・35失点・得失点差19

ホーム：勝ち点23 7勝 2分け 8敗、27得点・22失点  
アウェイ：勝ち点27 7勝 6分け 4敗、27得点・13失点



## “新生チーム”として新たなスタート波はあれど、今後への道筋見出す

2003、04年のリーグ連覇の中心となった奥大介や久保竜彦が抜け、厳しいシーズンになると予想された07年。だが、終わってみれば、2年連続で取った9位から7位へと順位を上げた。

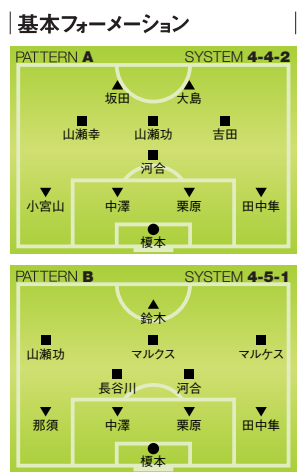
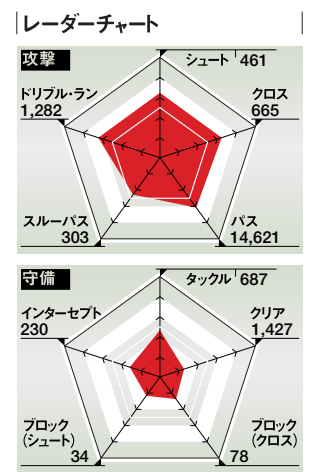
開幕前には3トップに取り組んでいたが、開幕直前に4-2-3-1へと変更。だが、これもチームにはフィットせず、スタートダッシュに失敗した。

だが、4-4-2へと変更すると、前線からのプレスが機能。攻撃的な守備から、素早く攻撃

に移るとい、自分たちのスタイルを確立していった。7節に5-0、8節に6-0と爆発し、5月27日の13節浦和戦から約1カ月間の6試合を無敗で駆け抜けるなど、好調の波に乗った。

それでも、その期間にも無得点で引き分ける試合もあるなど、足りない部分も見えてきた。ナビスコカップも準決勝で敗退し、一時は5位まで上がった順位も最終的には7位で終わった。

だが、小宮山尊信若手も出場機会を得て、新生チームにとって、悪い年ではなかった。



攻撃的なサッカーを標榜した今シーズンが、数値に表れた。山瀬功、山瀬幸とドリブラーが多いこともあり、ドリブルは増えたが、スルーパスは減った。守備の数値が軒並み低いのは、高い位置からの攻撃的な守備が機能していたことを表している

序盤には4-2-3-1を採用していたが、チームにフィットせずに4-4-2へと変更。前線からプレスを掛けるために選択した4-4-2だが、中盤で攻撃的な3人が前へと圧力を掛ける結果、4-1-3-2とも言えるフォーメーションとなる

### チーム内ランキング

ゴール	決定率	パス	成功率	クロス	成功率
大島 秀夫	14 24.1%	河合 竜二	1732 77.1%	田中 集麿	145 24.8%
山瀬 功治	11 14.3%	田中 集麿	1600 78.7%	小宮山 尊信	79 26.6%
坂田 大輔	10 13.9%	中澤 佑二	1542 78.1%	山瀬 功治	64 31.3%
山瀬 幸宏	4 13.8%	山瀬 功治	1178 78.0%	マルクス	58 24.1%
		小宮山 尊信	956 71.4%	坂田 大輔	56 28.6%

ドリブル	成功率	タックル	成功率	空中戦	成功率
山瀬 功治	145 44.8%	河合 竜二	113 85.8%	大島 秀夫	409 46.2%
小宮山 尊信	105 52.4%	中澤 佑二	100 79.0%	中澤 佑二	187 69.5%
坂田 大輔	89 50.6%	田中 集麿	69 81.2%	栗原 勇蔵	139 74.1%
田中 集麿	86 58.1%	山瀬 功治	65 76.9%	河合 竜二	115 64.3%
山瀬 幸宏	48 54.2%	小宮山 尊信	59 83.1%	那須 大亮	91 60.4%

### FIXTURES

選手	試合	時間	スタ	投入	失点	失効	セーブ	セ内	セ外	フィ	ロン	シュ		
GK	① 榎本 哲也	33	2917	33	0	29	24	5	90	38	52	629	643	86
	② 高桑 大二朗	1	53	0	14	4	3	1	2	1	16	16	0	
	③ 飯倉 大樹	1	90	1	17	2	2	0	6	3	3	18	13	5
	④ 秋元 陽太	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	⑤ 富永 康博	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
DF	② エウチーニョ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	③ 松田 直樹	8	697	8	0	1	3	354	3	1	2	0	13	5
	④ 那須 大亮	18	1330	14	4	0	7	676	8	28	11	13	37	16
	⑬ 小宮山 尊信	25	2126	24	1	0	16	956	24	79	18	105	59	17
	⑭ 吉村 光示	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	⑳ 中澤 佑二	32	2880	32	0	2	19	1542	12	2	5	12	100	39
	㉑ 田代 真一	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	㉒ 田中 裕介	10	730	8	2	0	5	344	8	17	5	19	25	4
	㉓ 天野 貴史	3	46	0	3	0	0	23	0	2	0	0	3	0
	㉔ 栗原 勇蔵	25	2057	23	2	0	15	866	4	3	2	0	58	15
	㉕ 河合 竜二	33	2942	33	0	3	19	1732	25	27	13	113	43	4
MF	⑥ 上野 良治	6	307	3	3	1	3	154	2	6	2	1	5	3
	⑦ 田中 集麿	32	2757	30	2	4	1600	29	145	25	86	69	18	8
	⑩ 山瀬 功治	32	2880	32	0	11	77	1178	50	64	47	145	65	21
	⑪ 狩野 健太	18	671	6	12	0	8	355	20	26	10	17	19	6
	⑫ 乾 貴士	7	121	0	7	0	3	52	3	1	5	11	2	2
	㉖ 堀川 岳人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	㉗ 山本 郁弥	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	㉘ 長谷川 アリアゴスル	2	180	2	0	0	2	61	1	3	1	4	2	0
	㉙ 山瀬 幸宏	30	1828	23	7	4	29	803	27	51	27	48	32	10
	㉚ マルクス	2	110	2	0	0	0	43	2	6	5	0	1	0
	㉛ 石原 卓	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	㉜ 金井 貴史	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
FW	⑧ マルクス	12	578	7	5	0	14	280	22	58	12	44	9	6
	⑨ 鈴木 隆行	3	172	2	1	0	4	57	3	10	1	6	4	2
	⑪ 坂田 大輔	34	2776	32	2	10	72	725	28	56	27	89	15	6
	⑫ 大島 秀夫	30	2546	29	1	14	58	932	31	8	36	25	15	5
	⑬ 吉田 孝行	22	1449	21	1	3	33	527	15	43	18	28	20	7
	⑬ 清水 範久	12	753	6	6	1	17	365	12	22	12	18	17	4
	㉑ ハーフナー マイク	15	265	1	14	0	11	85	1	1	3	2	2	0
	㉒ 斎藤 陽介	11	191	2	9	0	3	45	2	4	0	2	1	1
	㉓ 水沼 宏太	3	81	0	3	0	3	28	1	2	2	4	1	0

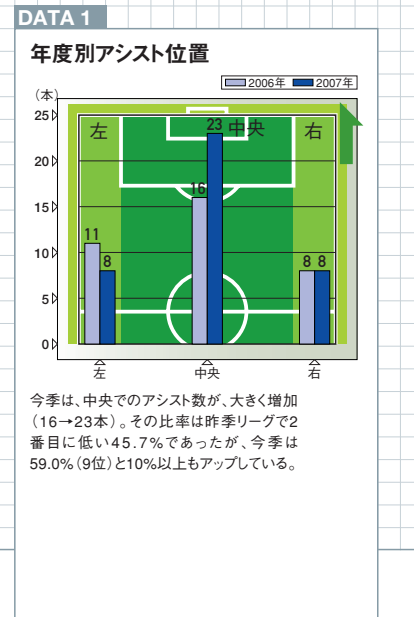
※青番号の●は途中移籍した選手、□は途中加入した選手  
※試合=出場試合数、時間=出場時間(分)、スタスタスタ回数、  
[GK欄] 投入=投入回数、失=失点、失効=失点PA内、失外=失点PA外、  
セ=セーブ、セ内=セーブPA内、セ外=セーブPA外、  
フィ=フィード、ロン=フィードロング、ショ=フィードショート、  
[GK以外] 送出=途中出場回数、ゴ=ゴール、シュ=シュート、  
パス=パス、スル=スルーパス、クロ=クロス、スル=スルーパス、ドリ=ドリブル、  
タックル、インタ=インターセプト]

## 攻撃の核となった大島の高さ

横浜FMの攻撃パターンは、今季途中に若干の変更が施された。最前線の大島秀夫が少し下がり、後方からのボールを頭で流した裏にFW坂田大輔と左右ハーフが飛び込む形を取った。昨季からのアシストの内容の変化を見てみると、中央からのものが増加 [DATA 1]。敵陣で5プレー以内にシュートにつながったパス

交換では、山瀬功治から坂田が1位、さらに大島から坂田へのパス交換が2位。大島のポストプレーの精度が表れている [DATA 2]。大島のポストプレーは自信を得たことで確実性を増し、チームメイトも「スペースを空けることはリスクもあるけど、秀夫を信頼して飛び出していきます」と

信頼を寄せた。大島からのパスの受け手1、2位は、それぞれ坂田と山瀬功。山瀬功は11得点、坂田は10得点、さらに大島自身も14得点と、前線の3人が2ケタ得点を上げているチームはほかにない。特に大島のヘディング8得点はリーグ1位。大島のヘディングが、チームの重要な鍵となった。



今季は、中央でのアシスト数が、大きく増加(16→23本)。その比率は昨季リーグで2番目に低い45.7%であったが、今季は59.0%(9位)と10%以上もアップしている。

### DATA 2 5プレー以内にシュートにつながったパス交換

順位	出し手	受け手	パス数
1	山瀬 功治	坂田 大輔	27
2	大島 秀夫	坂田 大輔	22
3	坂田 大輔	山瀬 功治	20

### フリックオン数ランキング(上位10名)

順位	選手名	チーム名	総数	成功率
1	高松 大樹	大分	103	16.5%(10)
2	ヨシケン	名古屋	98	34.7%(3)
3	矢野 貴章	新潟	93	19.4%(9)
4	大島 秀夫	横浜FM	89	40.4%(1)
5	田代 有三	鹿島	68	39.7%(2)
6	チョ ジェジン	清水	65	26.2%(4)
7	巻 誠一郎	千葉	64	25.0%(6)
8	レアンドロ	神戸	58	25.9%(5)
9	バレー	G大阪	51	23.5%(7)
10	近藤 祐介	神戸	50	20.0%(8)

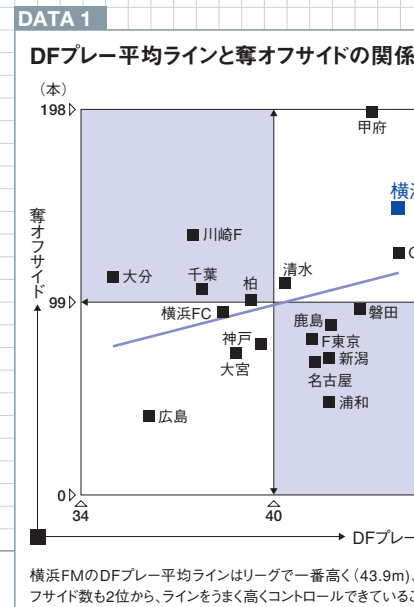
フリックオン数で、大島は4位にランクイン。40.4%の成功率は上位10名の中でトップで、つなぐことができるフリックオンをしていることが分かる。

## 高い最終ライン設定

今季の横浜FMは、攻撃的なサッカーを目指してきた。そのために前線へ多くの人数を掛けるが、その攻撃性を支えてきたのが最終ラインだ。前線からプレスを掛けて高い位置でボールを奪い、素早い攻守の切り替えからゴールを狙うスタイルを確立。この攻守一体となったプレーを、全体をコンパクトに保つことによ

って可能にしてきた。昨季のチーム全体のラインの高さは年間で見ると4位。特に、今年はDFがプレーする平均ラインの高さが1位となり、目指すサッカーを実践していたことを示している [DATA 1]。前期タックル数8位だったFWのチェイシングから始まり、ボールを高い位置

で奪う。そのために、中盤の底では河合竜二が奮闘した。1人でアンカーを務め、タックル成功数5位、インターセプト数4位という数値が示すように、守備に縦横無尽に走り回った [DATA 2]。ただし、被シュートに至る時間と失点に至る時間の差からも分かる通り、シンプルな速攻への対応が課題となった [DATA 3]。

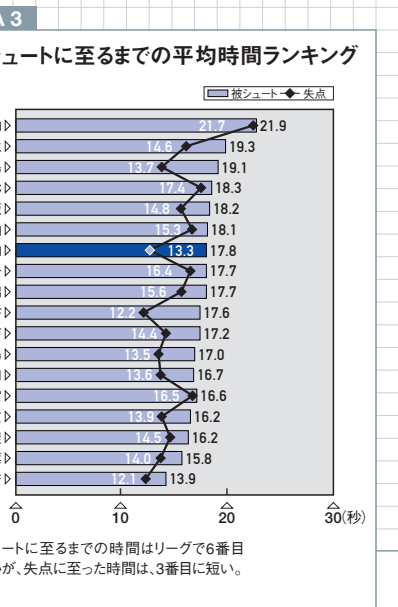


横浜FMのDFプレー平均ラインはリーグで一番高く(43.9m)、また奪ったオフサイド数も2位から、ラインをうまく高くコントロールできていることがわかる。

### DATA 2 河合スタツ

項目	数値	順位
接触数	2,132	(9)
パス	1,732	(6)
ショートパス	1,367	(6)
敵陣パス	1,046	(7)
MZパス	1,015	(8)
前方パス	987	(5)
タックル	113	(6)
インターセプト	43	(4)

接触数がリーグ9位、パスも敵陣や前方など攻撃的なパスがリーグ上位に入っている。また、チームのタックルは12位、インターセプトは16位と少ない中、河合はリーグトップ10入りしている。



被シュートに至るまでの時間はリーグで6番目に長い、失点に至った時間は、3番目に短い。

